

I 実践

1 研究主題

差別や偏見をなくす人権尊重の精神を養い、一人一人が互いを認め合い、助け合うことのできる児童の育成

(1) 主題設定の理由

本校は、「やさしく さとく たくましく 共に輝く大みかっ子の育成」を教育目標として掲げている。それを受けて、人権教育においては、学校教育全般の中で人権教育の精神を高め、差別や偏見を持たずに誰に対しても公平にふるまう生活態度を育てることをねらいとしている。また、各教科・道徳・特活などの特質に応じた教育活動全体を通して、人権教育の計画的推進を努めている。

本校の児童は、明るく素直である。一部の児童の中には、自己中心的な行動を起こしたり、他者の考えや気持ちを受け入れられず思いやりに欠けた行動を起こしたりする様子も見られる。

そこで、学校の教育活動全体を通して、一人一人が互いを認め合い、助け合うことのできる児童の育成を本主題として設定した。

(2) 研究の内容

- ア 特別活動、道徳、総合的な学習の時間を中心とした全教育活動における人権教育の充実
- イ 豊かな体験活動の展開

2 実践内容

(1) 特別活動、道徳、総合的な学習の時間を中心とした全教育活動における人権教育の充実

ア 道徳の授業の公開

年間の学校公開日のうち、全クラスが道徳の授業を公開する日を設定している。学年の年間計画や学級の実態に沿って様々な題材が取り上げられるが、担任は児童の心を豊かにするためよりよい授業展開の工夫を図っている。また、保護者参観の形をとることで、担任と保護者がともに子どもたちの思いや考えを受け止めることができ、情操の深化や実践につなげやすくなっている。

イ 総合的な学習の時間の実践

本校では、4年生が「レッツ トライ ボランティア」のテーマに沿って、目や手足の不自由な人の生活について調べたり体験活動をしたりしている。そこから、自分達にできることは何かを考え実践につなげている。また、このような体験活動や「ボランティア」を幅広く考える話し合いを通して、世界の貧困や各国の内戦・紛争から起こる様々な問題にも目を向ける児童も見られた。5年生の「世界の環境を調べよう」や6年生の「世界を見つめよう」へつながる良いきっかけとなっている。

ウ 帰りの会での友達への称賛

帰りの会では、各学年が実態に応じ、友達の良かったところや頑張ったところ発表する時間を作り互いを認め合う場を設けている。また、担任からも児童の良かったところを伝えることで、良い人間関係作りにつながっている。

エ 縦割り遊び

「人間関係を深め、誰とでも仲良く協力して活動できる児童を育てる」「高学年児童は企画・運営することによって主体性を育て、低学年の児童は節度をもって話したり、行動したりする態度を育てる」ことをねらいとして、年5回の第3木曜日のロング休みを利用して縦割り遊びを実施している。回を重ねるごとに高学年が低学年に寄り添ったり、優しく手助けをしたりする姿が見られるようになってきた。「ありがとう」という言葉に自己有用感や自己肯定感が高まり、縦割り活動をこえて、更なる活動への意欲づけとなっている。

オ 縦割り班清掃

上級生が下級生を思いやる心や下級生が上級生を敬う心を養い、互いに協力して活動する縦割り班清掃を年2回、約1ヶ月ずつ実施している。6年生が全員班長となり、それぞれの班に1～5年生が5～7人の班が構成される。初対面や顔なじみといった人間関係であるが仕事の分担をして毎日同じ清掃場所をきれいにすることで次第に仲良くなっていく様子が見られる。上級生の優しい声かけや励ましを受けるうちに笑顔で清掃に張り切る表情になっていく下級生がいたり、普段の清掃時では、積極的に取り組めない児童も、低学年のお世話をしたり、しっかりやろうと頑張ったりする高学年も多く見られた。このように、縦割り班清掃は、異学年交流という環境で活動することによって、上級生が下級生の面倒を見たり、下級生が上級生の良いところをまねたりしながら、同じ学校で生活する仲間であり年齢を超えた友達として互いを認め合う良い機会となっている。



(2) 豊かな体験活動の展開

ア ふれあい給食

地域のボランティアやゲストティーチャー、交流センターの委員さんなどを招き、ランチルームにおいて1・3・5年の児童全員と給食を食べる機会を設定している。児童は、日頃の感謝の気持ちを込めて歌や器楽演奏を贈り、地域の方々は、その様子に目を細め、温かい拍手をくださる。昔話や学校生活などの話をしながら一緒に時間を過ごすことで、自分たちが地域の方々に見守られていることに気づく良い機会となっている。また、「ありがとう」の感謝の気持ち、それを伝えられる貴重な場でもある。

イ 大みか交流センター主催の敬老会

9月に行われた大みか交流センター主催の敬老会に、3年生の児童が参加し、音楽の発表を行った。「茶つみ」の曲では、参加されている方の席へ行き、一緒に手遊びを楽しんだ。地域の方々から、「ありがとう」「楽しかったよ」と声をかけられ嬉しそうにステージに戻る子が多く見られた。また「とっても楽しかった」「また来年もやってほしい」とたくさんの笑顔もいただけた。



3 成果

様々な活動を通して、児童はお互いを認めたり助け合ったりすることの大切さを学び、実践することの意義を感じることができた。また、子どもたちが目や耳や肌で自分以外の多くの人と直接触れ合うことで、様々な立場の人とのつながりを感じながら自他の関係を見つめる良い機会となっている。

II 課題として

- ・特別活動、道徳、総合的な学習の時間を通して、人権について考える場や体験活動を意図的に設け、自己や他者を大切にすると人権意識や人権感覚を育て、さらに実践力のある児童の育成を図ってきたい。
- ・道徳の授業を公開することで保護者との連携を図ったように、家庭・地域への啓発も充実させ、学校・家庭・地域が一体となり人権教育に取り組めるように努めたい。